

和文誌論文電子投稿システム稼働

長谷川英之

2014年10月1日、和文誌の論文電子投稿システムが稼働を開始いたしました。電子投稿システム稼働の報を受け、私は最初に和文誌に論文を投稿したときのことを思い出しました。私が初めて投稿したころは当然、論文を紙に印刷して学会事務局に郵送していたのですが、印刷して郵送する、という手間がかかるが故に、発送したときは何とも言えない達成感を覚えたのを思い出します（と同時に、rejectになりませんように、という祈るような気持ちがあったのも良く憶えています）。しかしながら、手間がかかるが故の達成感の増幅と、電子投稿の利便性を考えたら、やはり圧倒的に電子投稿の利便性が上であることは言うまでもありません。初めて論文を執筆したころに比べ、論文執筆のための環境は当時想像できないくらい進歩したと、しみじみ感じています。

論文執筆環境が向上したことに関して、コピー&ペーストの問題など悪い面が大きくクローズアップされがちですが、利用者が理性的に活用した場合のメリットの方が遥かに大きいのは間違いないと思います。論文を投稿し易い環境になることで、埋もれてしまう貴重な知見やデータを減らすことができれば、電子化という変化の一つの大きな意義になると個人的には考えております。論文として新しい知見や得られたデータを蓄積し、希望すれば誰でも利用できる状態にしておくことは、大げさに言えば人類にとって大きな財産だと思います。私個人の体験として、ご指導頂く先生から「やりっぱなしにしてはいけない」とよく言われたものですが、その言葉には上述したような意味があるのだろう、と勝手に解釈しております。とは言え、実験結果等をきちんと論文としてまとめるという作業は、大変重要な作業である一方、なかなか大変な作業でもあります。も

のぐさな私などは億劫に感じてしまうことも多々あるのですが、論文を電子的に執筆して電子的に論文を提出できるようになったことは、(本質的な部分ではないものの)少なくとも論文執筆へのハードルを下げる効果が期待できるという点で前向きな変化と思っております。また、編集委員会では論文種別についても整理を行い、現在主に「原著」、「症例報告」、「技術報告」、「今月の超音波像」といった形で投稿を受け付けておりますので、皆様の発見・貴重なデータなど、和文誌へのご投稿もご検討頂ければ幸いです。

近年、実に様々な部分で電子化が進行しており、学生と話をしていると、私もだんだん世のデジタル化について行けなくなっているように感じるが多くなった気がします。自分も歳をとったなあ、と少し寂しく感じたりもするのですが、不思議なもので論文電子投稿システムなど必要なものは使えるようになるようです。つまり、本人のモチベーション次第ということだと思いますので、新しいものを取り入れる柔軟な心構えと意欲は持ち続けていたいのだと自分に言い聞かせている次第です。また、冒頭で、論文を提出したときの達成感について書きましたが、よくよく考えれば、今でも論文投稿の際、“submit” ボタンをクリックしたときには心地良い爽快感を感じるのです。rejectになりませんように、と祈る気持ちは昔より強く感じるようになった気がします。ということで、電子化で悪いことは何もないようです。電子投稿システムの稼働で、論文投稿に関する手間はかなり低減されると思いますので、埋もれている貴重なデータなど、原著論文や症例報告などジャンルを問わずご投稿頂き、人類の財産蓄積にご貢献頂ければと思います。

Web manuscript submission system for JSUM domestic journal is now open*

編集委員、幹事、東北大学大学院医工学研究科医工学専攻

Hideyuki HASEGAWA, Area Editor, Graduate School of Biomedical Engineering, Tohoku University, Miyagi, Japan

*JSUM: The Japan Society of Ultrasonics in Medicine